学位申請論文の審査結果の要旨

本審査委員会（以下、「委員会」と略称）は、京都府立大学学位規程 12 条に基づいて以下のとおり審査の内容を研究科会議に報告する。（なお、審査論文の内容については、「学位申請論文の要旨」を参照されたい。）

［経過］

委員会（森下委員、服部委員、村田委員）は、令和 4 年 4 月 14 日、5 月 19 日、6 月 2 日、7 月 14 日に会議を行うとともに、6 月 30 日に公開審査（最終試験）を実施した。公開審査会においては、学位申請者奥村幸雄から学位申請論文（以下、「論文」と略称）の概要が報告され、その後審査委員 3 名と出席者（総計 21 名）からの質問および意見に対して応答がなされた。委員による論文評価および公開審査会における質疑応答の概要は以下のとおりであった。

［評価］

日本社会は未曾有の高齢化が進む一方、身体的、心理的に幸福とはいえない高齢者が増え続ける状況にあり、これをいかに解決するかが重要な課題となっている。老年学の分野では、1960～70 年代にかけて、高齢者の「幸福な老い」についての代表的な理論である活動理論と離脱理論の間で論争が行われてきた。社会活動が個人の幸福感にポジティブな影響を与えるとする活動理論に対して、離脱理論は高齢者を排除する社会体系のメカニズムや加齢に伴うパーソナリティの変化、社会的離脱の普遍性などの重要な論点を指摘したが、その多くは検証されることなく成果の乏しいまま論争は収束した。その後に提起された successful aging の枠組みも、若さや生産性、多様な人間関係などを重視する物質的・合理的な幸福の捉え方を前提としており、必ずしもそれが幸福の普遍的なあり方を示しているとはいえなかった。このような研究の流れの中で、スウェーデンの老年社会学者 Tornstam(1989)は、高齢期における幸福は、それまでの時期と質的に異なる特性を有するものとして捉えるべきであるとし、神秘的・超越的な幸福の捉え方を主張する「老年的超越」概念を提唱した。

本研究はこうした研究動向を踏まえ、老年的超越概念が日本の高齢者・超高齢者に適用できるのか、どのような要因が老年的超越と関連しているのか、とくに東洋文化的な要因がどのように影響しているのかを解明しようとするものである。丹念な文献研究を実施した上で、東洋文化的な要因を東洋的な老いに対する態度に統合し、それを基に老年的超越との関連を実証的に明らかにしている。特に以下の諸点について、学術的・応用的な見地から優れた研究であると評価することができる。

１．本研究は、まず日本では十分に紹介されていない Tornstam(1989)の原著論文を詳細に読み込み、その概要をわかりやすい形で整理した上で、老年的超越概念を日本の高齢者・超高齢者へ適用する際の留意点を簡潔に説明している。そして、この老年的超越

概念が日本において適用された研究を質的研究・量的研究に分けてレビューし、日本における研究の到達点と課題について、今後の研究で利用しやすい形にまとめている。

２．老年的超越および主観的幸福感へ及ぼす東洋的な見方の影響を実証的に検討するため、東洋思想に関連する文献から実証研究に利用可能と考えられるものを選定し、そこから“東洋的なるもの”の構成要素を抽出した。これをもとに、「老いに対する東洋的態度」という構成概念に統合した上で、心理尺度を作成し、実証研究によりその妥当性と信頼性の評価を行った。老いに対する東洋的な態度を構成概念として実証研究で検討することは初めての試みであり、高い学術的価値が認められる。また、西洋の視点の中で理論化された東洋的態度について、東洋人の視点で内容を精査したことは、構成概念の妥当性を高めるという点で国際的にも意義のある成果だと見なすことができる。

３．量的な実証研究において、共分散構造分析により、従来の研究で認められていた老年的超越が主観的幸福感を高めるという因果の方向性ではなく、主観的幸福感が老年的超越を高めるという方向性を示す結果を得た。そして、クラスター分析により、この関係の背後に異なる類型の高齢者が存在することを示した。とくに、老年的超越が高く主観的幸福感が中程度のクラスター２と、老年的超越は低いが主観的幸福感が高いクラスター３を見出し、関連する心理・社会的要因を実証したことは、今後の超高齢化社会における高齢者自身と周囲の人間にとっての「幸せな老い」に対する多様な認識の形成につながるもので、学術的・応用的価値の高い研究成果である。

４．量的な実証研究が示す一般的傾向に隠れた老いの個別性を、後期高齢者と超高齢者に対するインタビューによる質的研究で補完する試みから、クラスター分析で抽出された各クラスターの性質、とくに老年的超越が高く主観的幸福感が中程度のクラスター２がもつ他者との関係性、バランスを志向する特徴が明確になった。また、戦争体験と老年的超越や東洋的見方が強く関連することを見出し、コホートの影響を明確に示したことも、量的実証研究を補完する貴重な学術的発見とみることができる。

以上の成果とともに、本論文は次のような課題を持つものである。

１．本研究は、老年的超越概念の日本の高齢者・超高齢者への適用の試みであるため、文献研究が日本国内のものに限定されている。Tornstam(1989)以後の海外での研究の進展が十分に検討されておらず、その流れの中での本研究の位置づけを今後は明確にしなければならない。

２．本研究におけるサンプルには戦争経験のある超高齢者が含まれており、そうした世代の個別体験が結果に影響している可能性がある。実証研究で明らかになった高齢者・超高齢者の傾向が一般性をもつものか、それともこの世代に特有のものかは本研究のみではわからず、今後の研究との比較が必要である。また、サンプルは高齢者大学に通うアクティブな高齢者が中心であり、老年的超越がとりわけ意味をもつ、心身の機能に衰えを感じる層が十分には調べられていない。こうした層においても同様の傾向が示されるのかも

検討する必要がある。

３．東洋的な老いに対する態度を明確にするために一般書を基にその構成要素の抽出が試みられたことは、最初に概念を構成する試みとしては適当だが、その構成要素が必要かつ十分なものであることが保証されているわけではない。より体系的な文献収集の方法を採るなどして、今後も概念の洗練を追求する必要がある。

４．量的研究では、先行研究とは異なり主観的幸福感が老年的超越を高めるという結果が示された。因果の方向性および概念そのものの位置づけについては、一時点の統計分析に基づくものであり、妥当性を主張するには限界がある。因果関係を明確に主張するには、概念の内容の洗練、概念間の関係の論理的分析、縦断的研究などでさらなる検証を行う必要がある。

[公開審査会の状況](敬称略)

6月30日(木)午後3時00分から5時30分まで、本学6号館ホール1にて公開審査会が行われた。

最初に、司会（森下委員）の開会説明に続いて、申請者が論文についてパワーポイントおよび配付資料に基づき約80分間の説明を行った。その後、まず村田委員が質問を行い、次のような質疑応答が行われた。

①老年的超越が有効な概念であるなら日本での研究蓄積がなぜ少ないのかという質問については、日本の老年的超越研究は大規模なサンプルを集められる研究機関が行う共同研究がリードしており、同じような規模の研究の実施が難しいことが原因ではないか、また、超高齢者研究を行うには研究者自身の人生経験が必要で、文献のみでは関心をもちにくいのではないかという可能性が指摘された。

②海外ではかなりの研究がなされてきているが、概念が提唱された後の老年的超越概念の研究上の位置付けはどうなっているのかとの質問については、本研究は日本における研究に焦点化しており、近年の海外の研究の渉猟が不足していたため、今後の研究課題としたい、との回答があった。

③第3章の東洋的見方についてのキーワード抽出に利用した書籍の選定基準を確認する質問に対しては、「東洋」に関する研究は膨大にあり、選定は恣意的にならざるを得なかった、目的が「東洋的な見方」を測定する心理尺度を作成するために一般人がもつ「東洋的」というイメージを把握することにあったため、日本人にとって東洋的なものとして代表的と考えられる、理解しやすい一般書に限定して選定したとの説明があった。

④量的研究・質的研究の統合はどの程度成功したといえるかとの質問に対しては、量的研究では高齢者を集団として見た場合の一般的な傾向を、また質的研究では調査だけでは見えにくい個別の高齢者の詳細な特徴を捉えることができ、両者の統合は一定程度成功したと考えているとの説明があった。

⑤今後、本研究の成果を社会の中でどのように活かすことができるかとの質問については、今後も高齢者が多くなる中で、人生に絶望する者に対して、できないことを自然に受け入れるような態度の転換を可能にする概念として老年的超越は有効ではないか、ま

た、アクティブなシニアを理想とするステレオタイプ的な見方に対する対極的な理想像として老年的超越は役立つのではないかとの説明があった。

次に、服部委員からの質問については、次のような応答があった。

①発達研究において重要で、多様な意味をもつ「人生の危機」の指標を、5年間の「病気」や「別離」体験に限定していることについてどう考えるかとの質問に対しては、Tornstam の研究を参照して比較するために内容を限定したことと、「人生の危機」という概念は単独でも大きなテーマであり、調査の中に取り込むには内容が限定的にならざるを得なかったことが説明された。

②量的研究において、女性において比較的年齢が若く高学歴の場合に老年的超越に否定的であることについて、戦争経験と学歴の影響をどのように考えるかとの質問に対しては、データの詳細な分析から、戦後生まれの高学歴の女性は老年的超越に否定的だが、戦争経験のある 80 歳以上では学歴による差はないとの結果を基に回答がなされた。

さらに、森下委員からの質問については、次のような応答があった。

①年齢の変数は具体的に何を意味しているのか、また、戦争体験の有無を含めて年代の意味をどう考えるのかとの質問に対しては、年齢には主観年齢としての意味もあり、時間軸を単純に直線的なものとしてとらえるのではなく、社会的・文化的なものとして、行動を規定する特徴を有する構成概念のようなものと考えている、また年代については、戦後世代にも東洋的なものを受けいれる背景はあり、本研究の結果が適用できるのではないかと考えているとの回答があった。

②Tornstam は活動性およびつながりを老年的超越の阻害要因になると考えており、本研究の結果と整合しないのではないかとの質問に対しては、Tornstam が老年的超越の阻害要因として考えているのは壮年期の仕事における活動性であり、社会活動はむしろ積極的に評価していること、つながりについては、仕事に従事していた頃の社会性とリタイア後のゆるやかなつながりを異なる性質のものと考えていることから、本研究の結果とは矛盾しないとの説明があった。

③主観的幸福感と老年的超越の因果の方向性に関する説明と、主観的幸福感が高いが老年的超越および東洋的な見方が低い第3クラスターに関する説明がもう少し必要ではないかとの質問に対しては、量的研究の詳細な分析結果で補足しながら、本研究で設定した因果の方向性が妥当であることと、第3クラスターには性別によるばらつきが存在する可能性があることが説明された。

その後、他の参加者と次のような質疑応答が行われた。

まず、石田正浩（本学公共政策学部准教授）から、①老年的超越とはどのような概念なのか、②東洋的見方と老年的超越は異なる概念なのか、③高齢期の発達の多様性を踏まえて、老年的超越をどのように位置づけるのか、との質問があった。これらについては、①心理学における態度におさまらない意味を有しており、成熟を達成価値とする発達段階と捉えられること、②因子分析結果から、それぞれ独立性があり、1つの概念には収まりきらないこと、③他の幸福な老い方もあり、ひとつの幸福の形であるとの回答があった。

また、中根成寿（本学公共政策学部准教授。発表後退席のため、後刻文書にて質問）から、本研究における母集団はどこに設定しているのかとの質問が出された。これに対しては、本研究では無作為抽出を行っていないので、母集団は、高齢者大学の受講生であるかどうかに関わりなく、生涯学習に関心のある関西圏の60歳以上の高齢者一般となるが、標本は母集団を代表する計画的な有意抽出であると考えているとの説明がなされた。

[審査結果の報告]

委員会は、以上の審査委員による論文審査と公開審査を通じて、申請者の強い課題意識、一貫した論旨と研究の蓄積を確認するとともに、論文は公共政策学研究科「博士論文の審査基準」(2017年1月5日)における「博士学位論文の評価の基準」(下記参照)に照らしてその基準を達成していると判定した。したがって、委員会は申請者が博士(福祉社会学)の学位に値するものと判断する。

[博士学位論文の評価の基準]

①明確な問題意識に基づいて研究の意義や必要性が論じられた独創的なものであること。
②当該分野の先行研究を渉猟し、批判・評価の作業が十分になされていること。
③研究の目的に照らして適切な研究方法がとられ、学術論文として論旨が明快で論理的に明確な結論を導いていること。
④研究成果が国際的な学術水準および学際的な観点から重要性があり、社会的要請にも応える発展性を持つものであること。